

研究論文

パレートからソシュールへ
—言語・貨幣・制度と情報文化—
From Pareto to Saussure.

— Language, Money, System and Information-Culture. —

村館 靖之 Yasuyuki MURADATE.

東京大学大学院情報学環

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo.

要 旨

パレートの政治理論・経済理論・社会理論と、ソシュールの言語理論を情報文化という観点から統一的に論ずることが課題である。19世紀末から20世紀初頭にかけてスイスで活躍したパレートとソシュールの理論は、価値のシステムに関する共時的・通時的理論を論じようとした点で共通性がある。言語と貨幣、制度と情報文化という観点からパレートの経済学・社会学に関する著作と、ソシュールの言語学に関する議論を比較検討することを試みる。パレート社会学における不変なるものと可変なるものは、それぞれ残基と派生と呼ばれている。これがソシュールの言語学における語根と派生語の関係に対応していることはよく知られている。本稿は、価値のシステムという観点からパレートの一般均衡理論、エリートの周流論、一般社会学とソシュールの一般言語学を比較し、その共通性を明らかにしたい。

Abstract

This Paper discusses on Pareto's Political, Economic, Sociological Theory and Saussure's Language Theory in the view of Information - Culture. Between late 19th century and early 20th century, Pareto and Saussure acted in Switzerland. Their theories have common points in order to discuss on Value System Theory in both static and dynamic view. This paper tries to discuss on Pareto's economic and sociological works and Saussure's Language texts. In Pareto's Sociology, there exist residues and derivatives. In Saussure's theory, residues and derivatives are radices and derivatives. This paper shows the common points of Pareto's General Equilibrium Theory, Circulation Theory of Elites, General Sociology and Saussure's General Language Theory.

1. はじめに：研究目的と課題設定

19世紀末から20世紀初頭にかけて、スイスで活躍したパレートとソシュールの理論には高い親和性がある。文献によれば、両者は友人であったとされる⁽¹⁾。政治学者、経済学者、社会学者、そして「不本意な哲学者」として知られるパレートの理論と、言語学者、記号論者として知られるソシュールの理論を、情報文化という観点から俯瞰し、分析を行うのが本稿の課題である⁽²⁾。パレートの理論は経済・社会システムの均衡を論じているのに対して、ソシュールの理論は言語における価値の均衡を論じているという点で共通点がある。パレートの経済学上の主著が『経済学講義』(1896,97)『経済学提要』(1906,09)、社会学上の主著が『一般社会学概論』(1916,23)として利用可能であるのに対して、ソシュール『一般言語学講義』(1916)は弟子のまとめた講義ノートという難点がある⁽³⁾⁽⁴⁾。しかし現在までソシュール研究が進展しているので、その成果を利用することで、ソシュールの理論にせまることができるだろう⁽⁵⁾。

情報文化の原点と呼べる片方論文では、情報文化は理念系、人間系、施設系から構成されると定義している[1]。基本構造のX軸である理念系は、伝承・連繫・記号から構成され

る。伝承は学習のことであり、連繫はコミュニケーションであり、記号は象徴である。つまり情報文化を構成する理念系の中で、記号は大きな役割を占めている。記号論に関して、その基礎を作った一人はソシュールである。基本構造のY軸である人間系は、映像・文字・音声から構成される。文字はテキストであり、音声はある意味でパロール(話し言葉)と関係が深い。言語学はテキスト理論に対して、基礎を提供すると考えられるし、パロールとエクリチュール(書き言葉)についてソシュールが言及したことは、よく知られている。基本構造のZ軸である施設系、つまりネットワークは、メディア、対話、同期から構成される。貨幣は交換の媒介、つまりメディアである。情報文化の基本構造と構成系についても、記号論や言語、貨幣といった観点、特にソシュールの学問体系と密接な関係がありそうなが読み取れる。また言語、貨幣は情報文化の基本対象の一つであり、さらに言語(ラング)で記述された社会制度は社会システムでもある。つまり言語、貨幣、制度と情報文化は深い関係がある。

言語と貨幣は、人間によって生み出された文化であると同時に、現代的には計算機で扱うことが可能という特性があり、情報文化の一種である。情報文化という学際的な場で、言語、

貨幣、社会システムについて比較検討を行うことは有意義であると考え、試論を展開することとした。

ソシユールに関しては、情報文化という観点で重要な理由は、上記に述べたように、情報文化学の基本構造と構成系について、記号論・言語学という観点から密接な関係があるためである。言い換えると情報文化学の理論的基礎とソシユールの貢献は深い関係がある。ソシユールのラング（言語）とパロール（話し言葉）の関係について、情報文化学の理論的基礎という観点から確認しておこう。ソシユールが言語学の対象にしたのは、パロールではなく、ラングである。このことを説明するために、言葉による人間のコミュニケーションについて確認したい。人間が言葉で会話する時、音声は口から発話され、耳から聴覚され、脳で解釈される。音声は一種の物理的現象でもあり、脳で理解されてはじめて意味を持つ。このような脳で理解されるものがラングであり、一方、音声や会話はパロールである。ラングとパロールを合わせて、言語作用としてのランゲージュになる。ソシユールの言語学では、ラング（社会言語の体系）を扱い、パロール（個人言語の体系）を扱わない。パロールや発話（ディスコース）を扱うのは現代では認知科学や認知言語学になるだろう。ラングは差異の体系といわれる。体系（英語で言えばシステム）は、価値の均衡を扱うので、その中には当然（価値の）差異も含まれる。その後、ソシユールのアイデアである体系は、構造と言換えられて、研究された。情報文化学の基本「構造」と構成「系」という基本的な考え方もソシユールに一つの起源を持っているといっても過言ではないだろう⁶⁾。ソシユール以後の言語学では、米国ブルーム・フィールドの構造言語学の影響もあって、言語の「構造」と「体系」を記述することが重視された。情報文化学においても、情報文化の「構造」と「体系」の記述が必要になる。

ここで今、あらためてパレートについて言及する意味についても触れておこう。パレートは政治学、経済学、社会学等に貢献があるが、彼の経済学の著作は例えば早川三代治の著作を除けば、日本語で完全な翻訳書は出版されていない⁷⁾。『経済学提要』はイタリア語版とフランス語版が存在し、英訳も出版されているが、残念ながら日本の読者にアクセスしやすい邦訳は、現時点では出版されていない。『一般社会学概論』は全体を4つのパートに分けると、非論理的行為、残基、派生、社会均衡に大別される。この最後のパートの社会均衡の部分が『社会学大綱』として訳されている⁸⁾。また『一般社会学概論』はあまりに分厚い著作なので、要約本の『一般社会学提要』に関しては、アクセスしやすい翻訳が存在する⁹⁾。『一般社会学提要』の邦訳本の校訂者である板倉達文先生は、『社会主義の諸体系』を邦訳されたが、出版を待たずに物故されており、ギリシア語の引用部分等を含め、校訂者が待たれる状況にある。つまり、日本におけるパレート研究は、パレートの経済学上の主著である『経済学講義』及び『経済学提要』がまだ翻訳が出版されておらず、社会学上の主著である『一般社会学概論』は部分訳と要約本の完全な邦訳のみであり、また主要著作に挙げられる『社会主義の諸体系』も翻訳がまだ出版されていない。

パレートの経済理論の重要性は、日々高まっている。純粋な

新古典派理論（一般均衡理論を中心とするミクロ経済学）だけではなく、パレートを経済物理学の観点から引用する学者も存在する。かつてパレート『経済学提要』はヒックスやサミュエルソン、それにヴィクセルといった経済学者によって研究され、現代の消費者理論にも強い影響を与えている。消費における所得効果と代替効果の分解、いわゆるスルツキー方程式の研究の原点もパレートにある。無差別曲線分析やエッジワースの箱などもパレートの研究対象であった。さらに現代においてはパレート法則の発見者として、経済物理の研究でもパレートの評価は高まっている¹⁰⁾。

情報文化という観点からも、政治学、経済学、社会学に対して大きな貢献をしたパレートを扱うことは有意義であると考え、パレートとソシユールを比較する試論を展開する。

2. パレートの理論の検討

パレートの理論を統一的に説明する試みを行わないと、ソシユールの理論と比較することは難しい。

パレートはもともと理論物理学や数学を専攻していたが、ローザンヌ大学でワルラスの後をついで、一般均衡理論という経済理論の研究をはじめた。一般均衡理論は、物理学の方法論をもとに、市場における全ての財・サービスの需給の均衡を連立方程式システムで分析する理論である。

パレートの経済理論上の貢献は大きく分けて2つに分かれる。パレート効率性の概念の提唱と、パレート分布の発見である。パレート効率性は、「ある集団ないし個人の状況を悪くすることなしに、これ以上他の集団ないし個人の状況を良くすることができない状態」であり、資源配分の効率性をあらわす概念である¹¹⁾。一方でパレート分布は、所得分配がべき分布のような不平等な構造をしていることを明らかにしている¹²⁾。

パレート効率性が、経済均衡の効率性を論じているのに対して、パレート分布では、社会システムにおける分配の不平等、一種の社会的不均衡を論じているという違いがある。

経済理論上でパレート効率性の概念を提唱したパレートは、社会学上で、現代の社会的厚生関数、社会的選択の理論を論ずることになる。

またパレート分布を発見した後、社会を構成する人間が一人一人非常にあらゆる面で異なっており、相互に理解不能な側面があるという社会的異質性を見抜いたパレートは、少数のエリートが実際はどの社会も支配しているというエリートの周流説を政治理論において唱えることになる。「人間社会は、大部分において、貴族政治の継起の歴史である」(文献[6],p.423)という言葉は、有名である。

また経済学の世界では、方法論的個人主義、序数的効用主義に基づく研究を推進していたパレートは、社会学においては、感情や信念などによって支配される非論理的行為を分析の主眼においた。

パレート社会学における最大のキーワードは、残基と派生である。残基は人間精神の不変の定数項で、派生は残基を覆い隠す似非論理であり、可変項である。パレートによれば残基は6種

類存在し、派生は4種類存在する。6種類の残基の内、重要なものは結合本能と集合体の持続の2つである。結合本能は新しい組み合わせを生み出し社会を革新する人間の側面であり、集合体（グループ）の持続の残基は、人間の保守的な側面である。結合本能と集合体の持続の残基の間でのバランスが、一種の社会均衡を決定する。派生は、断言、権威、感情ないし原理の一致、言葉の上の証明から構成される。派生は人間の感情を覆い隠すヴェール、イデオロギーと言い換えても問題ない。

パレート社会学のもう一つのキーワードは社会均衡である。パレートはまず経済学で全ての財・サービスの均衡である一般均衡を研究したが、その均衡概念を社会均衡へと拡張した。経済学では需要と供給が、古典力学の力に相当する概念であるが、社会学では、経済的利害、社会的異質性とエリートの周流、残基、派生等によって社会均衡が決定される。

パレートが言語学にも造詣があったことは、例えば『経済学提要』の中の以下の文章を引用すれば、示すことができる。「言語学における法則においてよい例を引き出すことができる。文法は先行しない、しかし話し言葉の形成の後を追う。」(文献[6],p.45)

パレート研究は膨大に存在し、様々な立場によって理解も若干異なるだろうが、基本的には、以上のように要約できる。

3. ソシュールの理論の検討

ソシュール研究は膨大に存在するが、パレートの理論とのかかわりを指摘したイタリアの言語学者トゥリオ・デ・マウロの議論を主に参照しつつ、ソシュールの理論を検討していこう。

『一般言語学講義』イタリア語版の校訂者トゥリオ・デ・マウロによれば、ソシュールとパレートの理論のかかわりは、『経済学提要』や『一般社会学概論』に主に表れているとされる⁽¹³⁾。

ソシュールはパレート『経済学提要』を読んでいた形跡があるし、パレートは『一般社会学概論』でソシュールの言語学を意識した言説を展開しているとされる。

ソシュールの理論は、共時態論と通時態論に分かれる。言語のシステムにおける共時的な価値の均衡理論と、言語の進化を論じる動学理論である。

ソシュールの理論は、ラング（言葉）とランゲージュ（言語作用）、パロールとエクリチュール、つまり話し言葉と書き言葉、シニファンとシニフィエ、形相（フォルム）と実質（シュブタンズ）、共時態論と通時態論といった二項対立構造が特徴的である。

ソシュールの理論の中で、特にラングとパロールの関係が重要である。ソシュールのラングは、社会言語の体系、パロールは個人言語の体系と言える。ソシュールが言語学において扱うのはラング、つまり社会言語の体系である。

言語学における語根と派生語の関係は、パレートの社会学理論における残基と派生の関係に対応する。言語学における不変なるものが、語根であり、可変なるものが派生語である。社会学において、不変なるものは残基と呼ばれ、可変なるものは

派生と呼ばれる。残基は人間精神に内在する不変の定数項であり、派生は残基を覆い隠す似非論理である。

『一般言語学講義』はソシュールの弟子の手によって編集されたもので、厳密にはソシュールその人の著作とは言えない。しかしながら、一度でも『一般言語学講義』をフランス語で紐解いたことがある人であれば、ソシュールが講義したとされる内容と、ワルラス・パレートに代表される経済理論の用語の類似性に気付くであろう。たとえば、『一般言語学講義』ではタトマン（模索）やイノベーション（革新）、均衡といった経済学とも関係の深い単語が登場する。さらに社会均衡や政治的均衡といった社会学にも通用する概念に言及がある。

『一般言語学講義』を読む時に、注意すべき点は、その内容は本当にソシュールが講義したオリジナルな内容なのか、それとも後から弟子が付け加えた内容なのか、整理しながら読む必要がある点だ。たとえば『一般言語学講義』の結論部分の最後の文章は、ソシュール自身の言葉ではなく、あとから弟子によって追加された言葉だとされる[15]。また『一般言語学講義』のテキストの配列にも注意する必要がある。ソシュールの一般言語学講義は3回にわたって行われたが、その講義の内容とテキストの順番が同様とは限らないためだ。

パレートの研究した経済学が数量的価値の均衡理論であるのに対して、ソシュールの研究した言語学は定性的価値の均衡理論である。扱っている対象は異なるが、両者は価値に関する均衡理論であると要約できる。

以下、パレートとソシュールの関連年表を作って、彼らの活躍した時代について探る。

表1 パレートとソシュールの関連年表⁽¹⁴⁾

年	パレート	ソシュール
1848年6月	パリにて出生	
1857年11月		ジュネーブにて出生
1870年	「均衡を決定する微分方程式の積分に関する基本的研究と剛体の弾力性に関する理論の基本原則」によりトリノ大学で工学の学位を取得	
1872年		「ギリシア語、ラテン語およびドイツ語の諸単語を少数の語根に還元するための試論」
1880年		「サンスクリットにおける絶対属格の用法」によりライプチヒ大学で哲学の学位を取得
1893年	ローザンヌ大学に就任	
1896-1897年	『経済学講義』	ジュネーブ大学専任教授(1896)
1901-1902年	『社会主義の諸体系』	
1906年	『経済学提要』 イタリア語版	
1907年		第一回一般言語学講義

1908年		第二回一般言語学講義
1909年	『経済学提要』 仏語改版	
1910年		第三回一般言語学講義
1911年	『美德の神話と背徳の文学』 仏語初版	
1913年2月		物故
1916年	『一般社会学概論』 イタリア語初版	『一般言語学講義』 弟子により出版
1920年	『事実と理論』	
1921年	『民主主義の変容』 イタリア語初版	
1923年8月		物故

上記のパレートとソシュールに関する年表からわかることは、パレートとソシュールはほぼ重なった時代を生きた同時代の人であり、同じスイスという国を中心にロマンス語圏で活躍していた。ソシュールが一般言語学講義を3回にわたって開講していたのに先立って、パレートの『経済学提要』のイタリア語初版が出版されている。トゥリオ・デ・マウロの指摘のように、ソシュールが一般言語学講義（第三回）で経済学と言語学の関係について論じた際、念頭にあったのはパレートの数理経済学に関する研究、一般均衡理論の研究であった可能性は大きい。『一般社会学概論』と『一般言語学講義』の出版年が偶然1916年と共通しているが、『一般言語学講義』はソシュールの死後出版されたものであり、ソシュールとパレートを比較するという観点からは、言語学と経済学に関する議論をまず検討し、その後、ソシュールの思想とパレートの思想の比較という観点で、二次的にラングと社会システムの制度の問題を取り上げるのが、順番であろう。もちろんテキストの比較という観点から、『一般言語学講義』と『一般社会学概論』の内容を比較することは興味深い課題である。

4. 貨幣と言語

経済学の対象である貨幣および貨幣的価値と言語学の対象である言語および言語的価値に関する均衡理論として、パレートの理論とソシュールの理論は関連性がある。

経済学で扱う貨幣は、価値尺度財である。つまり経済学でいうところの価値、価格は、全て単一の貨幣価値に換算できる。円とドルであっても、その交換比率である為替レートが定義できる。一方で、言語においては、その本質は多様性にあり、おそらく経済学のように単一の貨幣価値に換算することは、難しいだろう。経済学が需要と供給という貨幣的価値の均衡理論であることは疑いがない。また言語学も言葉のもつ価値の均衡について論じている。

それでは、貨幣的価値の不均衡（インフレやデフレ）、言語的価値の不均衡について論じる動学的な体系は存在するのだろうか？

貨幣の不均衡を論ずるものとして、『不均衡動学』が存在す

るが、言語の不均衡なるものを論ずるものは、今のところ不明である⁽¹⁵⁾。

言語も共時的な価値の均衡状態だけではなく、革新が発生し、経済学の企業のように、生成と消滅を繰り返す構造を持っている。不変なるもの間の価値の均衡を見出すことも重要だが、可変なるものの価値の不均衡について分析することも重要である。マクロ経済学において、不変なるものに相当するのはファンダメンタルズであり、可変なるものに相当するのはバブル項であろう。

言語や経済取引を分析するために、木構造という手段がある。経済取引において、事前にあらかじめすべて起こる分岐を予想し、完全な行動リストを作成する。このような展開形ゲームの木構造と、言語学における構文解析に利用される木構造は類似性がある。

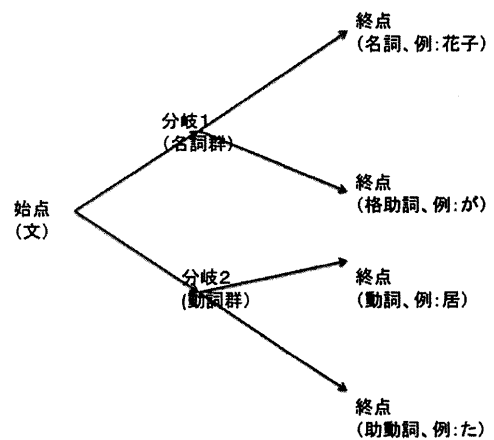


図1. 木構造の例（筆者作成）

パレートとソシュールの時代から離れても、数理経済学と数理言語学という観点、確率的均衡モデルとして両者は近い構造を持っている⁽¹⁶⁾。

経済学は分析において制約付最適化を重視する。言語学も話し手と聞き手の間でノイズを最小化するように、何らかの形で最適化を行った談話を分析する。

そもそも今人々によって話されている言語が、どのような基準によって最適化されているかは、わからない。しかし、一般に言語は多様性の増大と選択過程という最適化を経て、進化の結果として存在している。

どのようにして、ことばの科学と合理的資源配分の科学を結び付けられるかは、興味深い。そのためのきっかけとしてソシュールとパレートの比較を行うことは有意義である。

5. 制度論へ

自然言語で記述されている制度も情報文化論の対象であり、数理モデルに基づいて、計算機で分析が可能である。比較制度論は制度をNash均衡として分析している。一般に道路が右側通行か左側通行かといった問題はNash均衡の問題として整理できる⁽¹⁷⁾。

貨幣を扱う数理経済モデルの成果であるゲーム理論を、社会制度の分析に応用することができる。

純粋に法学を数理モデルとして展開することは難しいかもしれないが、境界領域として法と経済学がある。法と経済学の分野は、経済学でいえば応用ミクロつまりゲーム理論の公共問題等への適用となる。コースの定理のように民事問題だけではなく、囚人のジレンマの例のように刑事問題にもゲーム理論は応用可能である⁽¹⁸⁾。ゲーム理論は対立する利害関係者の間の調整を分析する理論であり、広い応用範囲を持っている。

パレート社会学も一種の制度論である。社会システムの理論である。当然社会システムの構成要素には慣習・規範・法が含まれる。パレートは社会システムの均衡を分析するのに、経済的利害、社会的異質性とエリートの周流、残基と派生の道具立てを用いた。社会的異質性は社会の多様性と読み替えても問題ないだろう。あるいは社会的異質性は社会の情動的要素である。社会情報、貨幣、社会階級の循環、本能や感情、信念体系と言い換えても問題ないだろう。これらの要素からなるパレート社会学、つまりパレートの社会システム・制度論を現代的に再構築するには、行動経済学やゲーム理論の知見が必要になる。情報や文化信念を扱うのはベイジアンゲームで、感情については行動経済学が扱っている。

そもそも人間は合理的行動から逸脱して選択行為を行うことがある。それをミクロの基礎として、新しい社会理論を構築する必要があるのではないか。

合理的行動からの逸脱とそれに対する罰則や規制は、行動法と経済学のテーマである。ゲーム理論や行動経済学をベースとして広く社会問題一般を扱う理論体系の構築は、興味深い課題である。

6. おわりに

パレートとソシールの理論を比較することで、少なくとも一般均衡理論と一般言語学の共通性を確認することができた。今後の課題はソシールに関しては、もっと資料を集めること。パレートに関しては、著作だけではなく、日記や書簡レベルのやりとりを追跡することも重要になる⁽¹⁹⁾。

パレートとソシールの理論の特徴と情報文化の関わりをここで整理しておこう。パレートは、まず経済学でワルラスの研究を引き継ぎ、需要と供給を連立方程式体系で分析する一般均衡理論の研究を行った。次に、社会を一種のシステム、制度と見なして、社会学的諸変数間の均衡、つまり社会均衡の研究を行った。ソシールはラング（社会言語体系）に焦点を絞り、言語学の研究を行った。ソシールのラング、つまり差異の体系に関する研究の取り組みは構造主義と呼ばれている。パレートやソシールに共通するパラダイムである体系や制度、均衡といった概念、特に体系の概念を構造と言い換えて、広く人文社会科学に応用するアプローチが構造主義である。パレートやソシールは、言語、貨幣、制度という現代的には情報文化にあたるものを分析するのに必要な道具立てを準備していたと言えるのではないか。

言語、貨幣、制度という問題意識のうちで、今回は言語と貨幣の関係を主に論ずるにとどまった。貨幣は単一の価値尺度に還元されうるという点では、言語、制度と比べシンプルである。また言語によって、現実の制度、とくに法システムは記述されているため、言語について分析を行うと、制度についても分析が出来るだろう。

ゲーム理論は貨幣経済や、比較制度の分析だけではなく、比較言語の分析にも利用できるだろう。右や左といった言葉の使用も一種の Nash 均衡である。

Nash 均衡としての言語の分析も重要である。また均衡分析という視点のみならず、システムの進化という視点からも言語、貨幣、制度は、共通的に扱える可能性がある。

情報文化の背景には、必ずシステムの進化が存在し、そのシステムの進化の経路を決めるものの一つが、情報文化である。言語、貨幣といった情報でもあり人間によって生み出された文化でもある存在、それには社会制度も含まれる。情報でもあり文化でもあるような存在の体系と構造の変化を分析することは今後の課題である。人間は合理的側面と同時に、感情や主観的信念によっても行動に影響を受ける非合理的側面をあわせもつ。言語、貨幣も人間によって生み出された文化である以上、言語と貨幣のシステムも合理性と非合理性を併せ持っている。

言語、貨幣は、ただ人間に生み出された文化ではなく、情報文化であり、システム性を持っている。言い方を変えると、言語、貨幣は、計算機上でその動きをトレースすることが可能で、さらに数理モデルとして記述できる。

さらに言語によって記述された制度も情報文化であり、計算機上で数理モデルとして扱うことができる。情報文化が、実は計算機上でデータとして分析が可能という特徴があり、その分析手法には統一性があり、機械学習や統計学の成果、ゲーム理論の成果を複合して数理分析にかけることができる。この可能性は大きい。

補論. ラングからアナグラムへ

パレートの研究対象の変化が松嶋氏の著作のタイトルのように『経済から社会へ』より正確には、「物理から、経済、そして社会へ」であるならば、ソシールの研究対象は「言語（ラング）から詩的言語（アナグラム）へ」であろう⁽²⁰⁾。パレートともソシールも、彼らの一般均衡理論、一般社会学、そして一般言語学に「一般」という頭文字がついているのは、それがただ総合的な学問であるだけではなく、科学という視点を明示的に打ち出している点である。パレートは、論理・実験の方法や斉一性という言葉を好んで著作で用いている。そして、パレートとソシールの目指していたものは、現代的には情報文化（貨幣や言語、社会制度）の科学的研究である。経済や言語、社会制度はシステム性を持つと同時に、人間によって生み出された文化でもある。パレートは『経済学提要』イタリア語版のサブタイトルを「付社会科学入門」としている。つまり、自然科学の対象とは、人間によって生み出された社会的・制度的要因であるという点で異なる、まさに文化という対象、現代

的には情報文化を科学的に分析しようとしたと考えられる。もちろん経済や社会は、社会科学の対象であり、言語は人文科学の対象である。しかし、自然科学の対象とは異なるものを、自然科学の方法論を応用して、「科学的」に分析しようという特徴がある。現代的には、貨幣、言語、制度は情報文化の一種として整理できるので、もちろん数理的な分析や計算機による分析とも親和性がある。しかし、パレートやソシュールの生きた今から一世紀前の世界では、情報文化を分析する共通言語としての数理科学は存在しても、手段としての計算機は存在しない。このような時代背景の中で、パレートやソシュールが研究対象を拡大・移行した背景を探る必要がある。

ここでは、あくまで試論・補論として、パレートとソシュールの研究対象の変化の要因について分析したい。

まずはパレート研究の視点から、経済から社会へという研究対象のシフトについて論じたい。もしパレートとソシュールの思想・科学論的背景に共通点や接点があるのなら、彼らの研究対象のシフトにも、共通の論理が、少なくとも仮説としては抽出できるはずだ。パレートの研究した経済理論、つまり一般均衡理論とパレートの打ち立てた社会理論、つまり彼の著作のタイトルから一般社会学（総合社会科学と言い換えても問題ない）は同じレベルで科学と言えるのかという問いを立てたい。

残念ながら、答えは否である。ワルラスが打ち立て、パレートが彫刻した一般均衡理論は、経済現象を需要と供給に関する連立方程式体系として分析する。背景には、消費者も企業も合理的であり、効用最大化、利潤最大化という制約付最適化行動をとると仮定している。あくまで一般均衡理論の指導原理は、合理的経済主体の行動科学である。一方で、一般社会学では、人間行動の非論理的な行為を分析する。つまり、パレートの社会学では、もともと非計量的な対象である社会システムとそれを構成する人間の行為を、非論理的な行為という観点から分析する。このような研究は、確定論的な連立方程式の分析や、数理モデルによる分析とは、なじみにくい特徴がある。

もちろん、現代においては行動経済学や比較制度分析、ゲーム理論のように、社会制度や、感情に影響を受ける人間の行為を分析する理論は発達している。しかし、パレートが生きた時点では、ワルラスが打ち立て、パレートが引き継いだローザンヌの一般均衡理論と、パレートが独自に生み出した総合社会科学としての一般社会学は、モデルの数理的記述という観点や、科学理論としての構成という点で、同じレベル・段階であったとは言えない。

もっともまずは計量的・数理的に分析が可能な対象を扱い、その後、その背景にある計量しがたい、数理モデルが組み立てにくい対象を研究していくという姿勢は、重要であると指摘しておこう。

パレートは、まずは合理的な人間行動（ホモエコノミクス）の分析を最初に行い、必ずしも合理的とは言えない人間の行動を、総合社会科学として分析を試みた。

もちろん、経済に関わる人間が、損をしたくない、できれば利潤や主観的満足を追いかけるということモデル化するのには王道である。しかし、貨幣取引や投資行動に関する人間の行動

についても、非論理的ないし非合理性がついて回る。それは感情や慣習、規範として影響している。このような貨幣に関する人間の行動は、まさに貨幣が情報文化、つまり計量・数理的に扱える対象であるだけでなく、人間という存在によって生み出された文化であるという側面による。人間そのものは、かならずしもすべてにおいて合理的ではなく、時には感情に左右される側面を持つ非合理的な存在を内包している。そして、そのような合理性と非合理性を併せ持つ人間によって生み出された文化は、当然のように合理性と非合理性を併せ持つ存在である。

さてここまで試論を展開すれば、言語（ラング）から詩的言語（アナグラム）研究へシフトしたソシュールの問題意識の一端に触れることができるのではないか。

もちろんソシュール研究において言語（ラング）とことば（ランゲージュ）を区別することや、対象としての詩的言語や神話と、それを構成する論理としてのアナグラムを分けて考えることは基本である。

しかし、ソシュールがなぜラングの研究からアナグラムの研究へ重心を移していたかは、一つの仮説で説明したい。

それは、ラングが情報文化の一種であり、合理的側面と非合理的側面を持っていることによる。そして、詩的言語や神話といったものは、必ずしも合理的側面のみで語られるものではない。非合理的側面、それはまさに文字通り合理的ではない側面を持っているが、従来の科学が対象としてきた（数理的に扱いやすい）合理的側面と同じくらいに、人間や情報文化を本質的に知るためには、研究対象として分析することが重要である。詩的言語や神話の研究は、人間の感情や慣習・規範といった要素、さらに現代的には情報文化を知るにあたって、不可欠のものである。しかし、少なくともパレートやソシュールの時代において、詩的言語や神話を数理科学として分析することは、至難であったことは想像に難くない。

詩的言語を文学の一種と読み替えると、文学と神話の関係を分析しているパレートの著作に『美徳の神話と背徳の文学』を挙げることができる⁽²¹⁾。この著作は、パレートの性的残基（性に対する社会的観念・イデオロギー）に関する主張を様々な文学作品や神話を例にとりて展開したものであるが、少なくとも『美徳の神話と背徳の文学』の著者であるパレートは、晩年においてアナグラム研究（詩的言語と神話の分析）にウェートをかけたソシュールの問題意識を理解できたのではないか。

もちろん、パレートとソシュールはほぼ同時代にスイスで活躍し、おそらくジュネーブ大学のナヴィル教授を通じて知人関係にあっただけで、書簡のやりとり等は確認されていない。また、パレートが『美徳の神話と背徳の文学』を出版したのは、仏語初版は1911年で、1913年に亡くなったソシュールが『美徳の神話と背徳の文学』まで参照できたかは疑問である。

しかし、パレートやソシュールは、ギリシア語やラテン語に通曉し、ギリシア・ローマ神話に詳しくあった。またパレートは、ギリシア・ローマの古典文化だけではなく、翻訳を通じて中国の孔子の『論語』も読んでいた。このような彼らの高い教養は、人間のもつ文化や情報文化についてメスを入れることを試みる研究を志向するに至ったとしても、全うであろう。

『美德の神話と背徳の文学』はパレートの中では余技の著作であろう。またアナグラム研究は、ソシールの生前出版されず、眠った研究である。しかし、パレートとソシールは、経済、言語、社会といった対象の中で特に価値に主眼を置いて、共時的・通時的な理論を展開しようとしただけではなく、人間の生み出した文化（現代的には情報文化）の非合理的側面にも注意を払い、分析しようとした共通点がある。従来、パレートとソシールを比較する言説は、システムの価値の均衡理論や、言語や社会において不変なものと同変なもの、つまり残基と派生、語根と派生語という点の指摘にとどまっていた。しかし、本補論では、パレートとソシールは文学や神話といったものに表れる人間の非合理的側面をも分析の視角にとらえようとした点で、共通点があると指摘した。その取り組みを分析して、引き継ぐことが現代の情報文化を専攻する者にも求められていると言えるのではないか。

注

- (1) 両者はジュネーブ大学のナヴィル教授を通じて、知人であったとされる。松嶋 [2] を参照。
- (2) 不本意な哲学者はフロイント [3] による命名。
- (3) パレートの経済学・社会学上の主要著作は [4][5][6][7] を参照。
- (4) ソシールの『一般言語学講義』(1916) は現代では仏語版であっても、イタリアの言語学者トゥリオ・デ・マウロの校注が利用できる [15]。またソシールの一般言語学講義の自筆原稿およびジュネーブ大学での講演はガリマル版『一般言語学著作集』(2002) が利用できる [16]。ソシール『一般言語学講義』の自筆原稿の邦訳は [17]、講義参加者のノートの邦訳は [18][19][20] を利用した。ソシールの一般言語学講義は生前三回にわたって行われ、講義の参加者のノートをもとに弟子が編集したのが『一般言語学講義』(1916) である [15]。ソシールの死後、講義に直接参加しなかった二人の弟子によって編集された『一般言語学講義』(1916) とソシールのオリジナルな思想とのかい離を埋めるためには、トゥリオ・デ・マウロの校注や、諸研究書、およびソシール自身による講義の原稿、さらに講義参加者のノートを読み込んでいかねばならない。ソシール自身による講義の原稿は「言葉の二重の要素について」や断片的なメモとして『一般言語学著作集』(2002) から利用できる [16]。
- (5) ソシール研究の基本文献として [21][22][23][24] を参照。
- (6) ラングとパロールの関係に関しては [32], pp.29-32 の議論を参照した。
- (7) 文献 [10] はパレート『経済学提要』イタリア語版の数学付録の翻訳とパレートの評伝。文献 [11] はパレートの動学モデルに関する『経済学講義』の微分方程式モデルと *Giornale degli Economisti* 誌に掲載されたパレートの論文の邦訳である。文献 [11] はあまり引用されないが、パレートの動学理論を日本に紹介した貴重な文献であると言える。
- (8) パレート『一般社会学概論』仏語版の部分訳として文献 [12] を参照。
- (9) パレート『一般社会学概論』の要約本の邦訳として文献 [13] を参照。
- (10) 経済物理学の標準的テキストとして文献 [14] を参照。
- (11) パレート効率性に関しては、[5] [6] を参照。パレート自身は、集団におけるオフェリミタの極大という表現を使っている。オフェリミタとはパレートの古典ギリシア語からの造語で、有用であるという意味で、主観的効用をあらわす。パレートは効用という言葉の、有用であるという意味と経済学者のいう主観的な欲望の適合関係の二重の意味を嫌い、オフェリミタという造語を主観的効用の表現に用いることを提唱した。身体に悪い薬物であっても中毒の患者には、主観的効用はあるかもしれない。そのような意味でパレートは主観的な欲望の適合関係にオフェリミタという造語をあてた。パレート効率性の一つの解釈は、一般均衡近傍で N 人ゼロサムゲームが成立していることだ。そこからの微小な移動は、ある主体にとっては不利、ある主体にとっては有利となる。契約曲線のようにパレート効率性を満たす集合は一つとは限らないので、厳密にはパレート最適 (Pareto Optimum) という用語よりもパレート効率性の用語が望ましいとされる。パレート効率性の用語がパレート最適の用語より望ましいと説明している文献は、英語であればアロー&ハーン [31]、日本語であれば、奥野・鈴木 [30] であろう。
- (12) パレート法則に関しては、[4] を参照。一般にパレート法則とは、所得分配がべき分布に近い分布をしており、どこかの社会でもどの時代でもパレート分布という不平等な所得分配の構造が維持されていることをパレートは主張した。このようなパレートの研究は、現代では経済物理学の一つの出発点とみなされている。
- (13) トゥリオ・デ・マウロのパレートとソシールに関する注は、[15] の 68 番と 165 番のコメント (p.423, p.451) を参照。N.68 ではパレート『一般社会学概論』とソシールの議論の同調。N.165 ではソシールの「第三回講義の内容」とパレート『経済学提要』の関係が述べられている。『一般言語学著作集』(2002) の「第三回講義のメモ：記号の共時的・通時的変化の必要性」(p.332) によれば、「経済学は媒介する全ての諸力に伴う社会的諸力として、労働と資本の間の均衡を基本的に扱うことを我々は知っている」という一節がある [16]。ソシールの第三回講義では、経済学がいわゆる政治経済学（理論経済学）と経済史（歴史経済学）に分かれることを指摘して、言語学も共時態論と通時態論に分かれることを指摘している。それは、言語学も経済学も価値の均衡を扱う理論であるからである。しかし、ソシールが均衡概念を安定的かつ望ましいものと考えていたかは、疑問である。『一般言語学著作集』(2002) の「ジュネーブ大学第二回講演 (1891 年 9 月)」において「ランゲージにおいて安定かつ永続的な意味での均衡は現実には存在しない」(p.158) と言及しているためだ [16]。現代においても経済学では均衡は安定的で、永続的なものであるという見方が一種のパラダイムになっている。たとえば、均衡における利子率を自然利子率、失業率を自然失業率と呼ぶように、長期均衡は安定的で永続的であり、望ましい (= 自然) という性質があると考えられている。一方で、ソシールはランゲージつまり人間のもつ言語化作用においては、安定かつ永続的な均衡は存在しないとラディカルな主張を展開している。言語 (ラング) は不易性と同時に可変性を持つ存在である。均衡が存在しても、次の均衡にすぐ移動することや、あるいはそこから離れてしまうこともある。ソシールの言語学における不均衡的なものの見方は興味深い。パレートは経済危機論に言及し、その社会観は時に社会的不均衡論的ともみなせるが、経済学者としては均衡概念を非常に重視し、静学的均衡と逐次均衡、動学的均衡の概念があることを指摘していた。つまりパレートの経済理論や社会理論の基軸はフロイントの主張した通り、均衡理論である [3]。通常、経済学者として不均衡理論の提唱者の一人として見なされるのは、パレートではなく、ヴィクセルである。しかし、さらに踏み込んで議論を展開するとパレートは『経済学提要』(1906, 1909) において貨幣数量説を批判している [5][6]。パレートの貨幣数量説批判の要点は、「全ての諸価格が同時に同じ比率で変化することはありえない」(p.369) といった価格の粘性の指摘である [6]。このような貨幣数量説批判から、パレートが理論上は一般均衡が存在するが、現実には長期均衡には到達しないと考えていたと推論することは、可能ではないだろうか。少なくともパレートは一般均衡に独占（不完全競争の視点）を導入し、摩擦や価格の粘性の下での一般均衡からの二次的接近を模索するように、現代の新ケインズ派の取り組みに近いことを行っていたと言えるのではないか。
- (14) 年表は、ボネッティ『パレートの政治思想』(1994) pp.93-104. [25]、丸

- 山『ソシユールを読む』(1983)pp.309-311[22], を参照して筆者作成。
- (15) 貨幣と不均衡に関する基本文献として, [26][27]を参照。[26]ではピアジェの議論を引用して, 一般均衡理論とソシユールの言語学の関係を論じている。[27]は貨幣経済に内在する本質的な不安定性を, ヴィクセル, ケインズに遡ってモデル化した本である。
- (16) 確率的言語モデルに関しては, [28]を参照。確率的言語モデルで使われる数学は, 経済学の動学的一般均衡モデル(DSGE)と共通のものが多く。
- (17) 比較制度分析に関しては, [29]を参照。[29]では, 第10章の冒頭でパレート『一般社会学概論』英語版を引用している(p.267)。第10章は「制度の通時的連結」と題されているが, ソシユールを読んだことのある人であれば, 通時的(ダイアクロニック)と共時的(シンクロニック)という問題意識の分け方は, 彼に一つの起源があることを想起するはずである。青木はソシユールを引用していないが, 制度進化の問題をラングという制度の進化の問題に適用する試みも興味深い研究課題とは言えないだろうか。
- (18) 応用ミクロ経済分析に関しては, [30]を参照。日本語で書かれたミクロ経済学のテキストで, パレート『経済学提要』を参考文献リストに加えて言及している少ない文献の一つである。
- (19) 若干ではあるが, パレートの晩年の日記はパレート全集から利用できる。文献[9]を参照。
- (20) パレート研究の日本語での信頼できる文献として[2]を参照。
- (21) パレート『美徳の神話と背徳の文学』は仏語全集版[8]を参照。この著作の内容は美徳の神話の方が, 背徳の文学よりウェートが大きい。ギリシア・ローマ神話の内容が中心である。

参考文献

- [1] 片方善治「サイバースペースの文明と文化-コミュニケーション環境と情報文化に関する考察-」情報文化学会誌, 1,1, pp.3-16, (1994).
- [2] 松嶋敦茂『経済から社会へ: パレートの生涯と思想』みすず書房, (1985).
- [3] フロイント, J. 小口信吉, 板倉達文共訳『パレート: 均衡理論』, 文化書房博文社 (1991).
- [4] Pareto, Vilfredo. *Cours d' économie politique*. Geneve, Droz. (1896-97, Reprinted in 1964).
- [5] Pareto, Vilfredo. *Manuale di economia politica con una introduzione alla scienza sociale*. Milano, Societa editrice liraria. (1906).
- [6] Pareto, Vilfredo. *Manuel d' économie politique*. Geneve, Droz. (1909, Reprinted in 1966).
- [7] Pareto, Vilfredo. *Trattato di Sociologia Generale*. Torino, UTET. (1916, 1923, Reprinted in 1988).
- [8] Pareto, Vilfredo. *Le mythe vertueuse et la littérature immorale*. Geneve, Droz. (1911, Reprinted in 1971).
- [9] Pareto, Vilfredo. *Sommaire du cours de sociologie suivi de mon journal*. Geneve, Droz. (1967).
- [10] パレート, 早川三代治訳『数学的経済均衡理論』丸善, (1931).
- [11] 早川三代治『動的均衡および動態に関するパレートの基礎方程式』丸善, (1932).
- [12] パレート, 北川隆吉, 廣田明, 板倉達文訳『社会学大綱』青木書店, (1987).
- [13] パレート, 姫岡勤訳; 板倉達文校訂『一般社会学提要』名古屋大学出版会, (1996).
- [14] 青山秀明・家富洋・池田裕一・相馬亘・藤原義久『経済物理学』共立出版, (2008).
- [15] Ferdinand de Saussure; publié par Charles Bailly et Albert Séchehayé avec la collaboration de Albert Riedlinger ; édition critique préparée par Tullio de Mauro ; postface de Louis-Jean Calvet. *Cours de linguistique générale*. Paris, Payot & Rivages. (1916, Reprinted in 1995).
- [16] Ferdinand de Saussure ; établis et édités par Simon Bouquet et Rudolf Engler ; avec la collaboration d'Antoinette Weil. *Écrits de linguistique générale*. Paris. Gallimard. (2002)
- [17] フェルディナン・ド・ソシユール, 松澤和宏校注・訳『一般言語学』著作集I: 自筆原稿『言語の科学』岩波書店, (2013).
- [18] フェルディナン・ド・ソシユール, 小松英輔編, 相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第二回講義』エディット・バルク, (2006).
- [19] フェルディナン・ド・ソシユール, 相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第三回講義』エディット・バルク, (2003).
- [20] フェルディナン・ド・ソシユール, 影浦峯・田中久美子訳『ソシユール一般言語学講義: コンスタンタンのノート』東京大学出版会, (2007).
- [21] 丸山圭三郎編『ソシユール小事典』大修館, (1985).
- [22] 丸山圭三郎『ソシユールを読む』岩波書店, (1983).
- [23] 立川健二『<<力>>の思想家ソシユール』風の薔薇, (1986).
- [24] 前田英樹編・訳・著『沈黙するソシユール』書肆山田, (1989).
- [25] Bonetti, Paolo. *Il Pensiero Politico di Pareto*. Bari. Editori Laterza. (1994).
- [26] 岩井克人『貨幣論』筑摩書房, (1993).
- [27] Katsuhito, Iwai. *Disequilibrium Dynamics*. Yale, Yale University Press. (1981).
- [28] 北研二『確率的言語モデル』東京大学出版会, (1999).
- [29] 青木昌彦, 滝澤弘和・谷口和弘訳『比較制度分析に向けて』NTT出版, (2001).
- [30] 奥野正寛・鈴木興太郎『ミクロ経済学II』岩波書店, (1988).
- [31] Arrow K.J. and Hahn F.H. *General Competitive Analysis*. Amsterdam. North-Holland. (1971).
- [32] 町田健『ソシユールと言語学-コトバはなぜ通じるのか』講談社現代新書, (2004).

著者紹介

村籠 靖之(むらだて やすゆき)
東京大学大学院情報学環特任研究員。